

なでしこ、女王陛下の水兵になる！

第一回「郷に入れば郷に従え」

1997年15歳の劣等生

私は幼少期から家族で海外旅行に行っていたこともあり、外国には小さな頃から慣れ親しんできました。その反面普段の生活では日本の小中学校で先生や他の生徒と馴染めず、身体的なコンプレックスもあり、引っ込み思案な劣等生でスポーツと社会科、芸術くらいしか高い点数が取れませんでした。そこで、イギリスに行き英語を習得して世界中にたくさん友達を作りたいという強い気持ちがそのころから心の底から懇々と湧き出てくるようになり、「他の人が出来ない事を武器にして、仕事に取り入れていきたい」と思うようになりました。それが15才でイギリスに単身留学を決めた理由でした。

両親は私の留学に大反対でしたが「情熱」で父親を説得し、比較的裕福な家庭に生まれた事も幸いし、劣等生の私でもイギリスに行く夢が叶いました。20年前のイギリス留学の状況は、イギリス人及び旧 EC（欧州共同体）以外の生徒は授業料が通常の4倍程は高く取られました。イギリス人でも全寮制高校は高嶺の花で、通えるのは一部の階級の子弟及び奨学金を得ることが出来た優秀な生徒のみでした。

「超保守的な英国の田舎」

イギリスのシェフィールドと言う田舎町を訪れたのは1997年の4月15日。その町は炭鉱の街として古くから栄えていました。住民は圧倒的にイギリス白人が多く、その他の人種は大戦中に迫害を受けた東ヨーロッパ（主にポーランド人）の移民をルーツに持つイギリス人が住む町で日本人が一人もいないところでした。なぜそのような所を選んだかという、父親に留学を認めてもらう際に交わした約束の中に、ロンドンのような都市ではなく、「日本人のいない学校」を選ぶことという約束があったからでした。



中国系の住民も数えるほどしかいないシェフィールドの全寮制学校で、一日目がフランス語の授業で始まり、日本にいたころは英語が下から数えたほうが早い成績だった私はかなり困惑したのを今でも覚えています。

イギリスの国民性または地域性なのでしょうか、「話せない者来るべからず」という姿勢が色濃く出ていて、クラスメイトも一人として私に気さくに声をかける人はいませんでした。泣いている時間もなく、と

にかく「生きる」為には身振り手振りで英語を話しながら、毎日友達の数を増やしていきました。

イギリス(ヨーロッパ)人は、心に「壁」を設ける国民性で心を簡単には開きません。私も、中学までは引っ込み思案で自分を出すことが苦手だったので、それが原因で何度も泣きそうになりましたが、そこは自分が進んでイギリスに行きたいと願った以上、帰国しようと思ったことは全くありませんでした。

「恥をかき捨て」案ずるよりも生むがやすし

2日目の朝に起きた際、同部屋に5人のイギリス人の同い年の女の子がいて、恥もかき捨てと思い”Hi, I’m Miwa. I’m from Japan.”と言ってその輪の中に入ろうと頑張り、その五人に朝食の会場と一緒に連れて行ってもらった事が昨日のように思い出されます。勉強は全くついていけなかったのですが、スポーツは言葉が不要に近く、陸上などでは州大会に出場できたおかげで、周りの見る目が変わり徐々に友達の幅が広がっていくのがわかりました。言葉以外で何かが出来るというのはとても必要な事だとその時に実感しました。そして「郷に入れば郷に入りきる」に徹したことがとても役立ったと思います。そのようになるまでに、両親に電話もしなければ手紙も書きませんでした。

日本人留学生の中には、首都ロンドンに週末集まったりして日本食を食べ、日本語で会話をする方も多かったようですが、私は「それでは、イギリスに何のために来たのかわからない」と思い、一度もその輪に入ったことはありませんでした。

渡英後、99%イギリス人ばかりの環境にしながら英語漬けの生活をしばらくしていると、友達も次第に増えてきて、週末に家に招いてくれる仲良しもだんだん増えてきました。一番語学力が付いたと感じたのは、その最初の夏休みに4人の友達から招かれ、各家庭で長期滞在しながらサマーフェス(夏に屋外で行われる音楽祭)などに行ったり、近隣諸国に旅行に行ったりしたときです。同時にそれがその後の人脈に繋がっていったと思います



Leeds Festival in 1997

英会話も勉強も←彼らと夏休みを共にしたことをきっかけにどんどん伸びていき、新学期に入る頃には能力別に5クラス別れる内の3番目のクラスに入ることが出来ました。そこからは、自分に自信がついたのか勉強にも運動にも専念でき友達の輪も学年を超えたくさんでき、学校内で私を知らない人間はいないほどになりました。

「茨の道」

イギリス社会における日本人留学生の状況というのは、特別な配慮はほとんどなく、「イギリス人同等」の生活で病気や怪我をしても通訳がいるわけでもなく、自力で現地 NHS 機関（National Health Service 英国の公的医療機関）を使用し対処してきました。医療機関といってもそのサービス内容は日本の医療機関とは大きく違います。日本では、海外からの留学生や就労者に英語や中国語など多国語で通訳対応などがされますが、イギリスではそれは殆ど見られません。特別にお金を払って「保険」を英国で支払った外国人しかそのサービスは適用になりません。

外国人留学生の私に唯一あった配慮は、学校に入ってから最初の 2 か月だけ”Extra English”という生活に必要な最低限の英語を教える補習授業だけでした。イギリスの学校の第 2 外国語であるフランス語も、イギリス人と一緒に授業を受けていました。

「スポーツが呼ぶ！」

イギリスの学校にも部活動があります。しかし、私の学校の場合は所属する部活動の選定方法は日本の場合と大きく異なり、自分の希望によって種目を選ぶことは出来ませんでした。新学期が始まる 9 月に適正テストがあり、適正テストの結果により学校側の判断で生徒を振り分けるという方法でした。スポーツが盛んな学校ではこのシステムを多く取り入れているようです。



At a night club, 1998.

スポーツが得意だった私は前期がラグビーで中期は陸上、後期はグランドホッケーに振り分けられました。幸か不幸かそのおかげでイギリス発祥のスポーツにいそしむ事が出来ました。更には全種目で州大会にも出場することが出来るようになり、放課後も練習を続けていくことで、更なる技術を得たいと思うようにもなりました。プレー中は積極的に友達に話しかけ、共に練習をすることにより信頼関係を深めていくことが出来ました。同じフィールドで一つのボ

ールを巡って戦うライバルでも、相手あってこそ成り立っているというスポーツの特性のおかげで、さらに強い絆が出来たようにさえ感じました。

週末も男女問わずラグビーやホッケーの仲間から家に招かれるようになり、現地の生活に直接触れることが出来るようになったため、イギリスの生活も確実に楽しく有意義になっていきました。男女混合で庭の広い邸宅に招かれた際には、スクラムを組みプチラグビーをしたこともありました。

食文化においては、日本人にはあまり良いイメージの無いイギリス料理ですが、中にはとてもおいしいものもあり、週末に家庭やパブで出されるのですが、ガスオーブンで良く焼いた肉にグレイビーソースがたっぷりかかったたくさんの肉を大勢の人で楽しむ「ローストディナー」を満喫することが出来ました。



イギリス人は料理と同じで「慣れればとてもつきあいやすい」人々です。最初はかなりいぶかしげに見られ萎縮してしまう感じでも、数をこなし、会話を増やしていくうちに仲良くなれます。ただ、「引き際」もアッサリとしている国民で「去るもの追わず」も顕著です。あくまでも、自分から接していないと人とのコンタクトは消える、そんな国民性です。

「郷に入れば郷に従え」

私は「黄色人種」でありながらも人種差別を特に感じた事はありません。ある意味ではとても幸運な人間でした。やはり、その国に従いつくしたことが結果的に良い方向に働いたのだと思います。

イギリスの歴史を理解し、友好関係を築き、他人の家庭の中に入っていける程イギリスの生活に浸透していった事、そして「言葉」の壁を越えようと無我夢中で必死に現地の人とコミュニケーションを取っていったことが現地の方々に認められたのでしょうか、「おまえはどこの国の人間だか解らない」とさえ言われるようになりました。

おまえは英国人ではないけれども、日本人でもない。どこの国に行っても対応できる人間だ・・・ということを経験し嫌みっぽく言われたのだと思います。

「郷に入れば郷にとことん従え」

これから海外へ赴かれる日本人、そして今日本に住む外国人の方に声を大にして伝えたい昔からの言葉です。

郷に入りこんだら、その国の人間のようになりきって生活することを私は批判しません。そうすることにより、様々な事を覚え吸収することが出来ますし、ひいては自分の国を客観的に見ることも出来るからです。